

扶助の輪を広げて危機克服へ

1月26日、大阪・天王寺区のシェラトン都ホテル大阪 組合員らおよそ130名が出席



◀ 加賀理事長

近畿印刷産業機材協同組合(加賀順三理事長)は1月26日、大阪・天王寺区のシェラトン都ホテル大阪において新年互礼会を開催。組合員らおよそ130名が駆けつけ、新年の門出を共に祝った。

互礼会の冒頭、新年の挨拶に立った加賀理事長は、「危機を乗り越えるには自助、公助、扶助、3つの助力が必要だが、日本の現状から公助には期待できず、自助もすでに精一杯。

後は扶助を大きくする必要がある」とした上で、「組合行事での交流を通じて扶助の輪を広げていただくこ



講師の尾鍋氏

とが組合活動の柱」と述べ、理解と協力を求めた。

また、「企業生き残りの道はオンリーワンを持つことだ」とした上で、日本製の品質に対する絶対的な信頼、また、江戸と上方の大工仕事を比べた古い例え話を紹介。「見てくれにこだわった江戸と違い、上方の仕事は人の目の届かぬところも手を抜かない。こ

の関西に脈々と受け継がれてきた仕事に対する伝統を我々はまだ一度思い起こしてみることが必要ではないか」と呼びかけた。

この後、上野耕治副理事長による乾杯発声で祝宴へと移り、新年を祝う歓談が繰り広げられた後、最後は弓倉清副理事長による閉会の辞でお開きとなった。



また当日は互礼会に先立ち、恒例の新春講演会も併催され、今回は、(社)日本印刷学会前会長で東京大学名誉教授(製紙科学)である尾鍋史彦氏を講師に迎え、「人間科学から見た紙・印刷の価値と新たな可能性」と題して、およそ1時間半にわたる講演が行われた。

尾鍋氏は、「日本の産業界全体が直面する大きな問題は少子高齢化社会に伴う



国内市場の縮小と、その対策としての海外への工場の移転に伴う国内の空洞化の可能性増大であるが、印刷業界において特に重大な関心事は、『紙メディアを大量に使うことに伴う倫理的な懸念および環境問題』、『電子メディアの拡がりによる印刷需要の減少の危惧』であろう」と指摘した上で、印刷産業が「紙という人間との親和性が高く、また再生産かつリサイクル可能で環境調和性の高い素材を使うユニークな産業である」という視点を中心において、紙・印刷の価値を再発見し、印刷産業の新たな可能性を探るという内容となった。

平成23年度 理事会

日 時：平成24年1月26日(木) 15:00～

場 所：シェラトン都ホテル大阪 5階 カトレア(大阪市天王寺区上本町6-1-55)

出席者：出席者 11名

1) 報告事項の件

前回理事会(平成23年12月19日)以降における当組合の事業状況を報告し、その承認を求めたところ全員異議なくこれを承認した。

2) 既案内事業進捗状況報告の件

既に案内済みの事業の進捗状況を報告し、その承認を求めたところ全員異議なくこれを承認した。

3) 大阪府地場産業等総合活性化補助金事業の件

大阪府地場産業等総合活性化補助金事業最終研修会開催詳細を報告し、その承認を求めたところ全員異議なくこれを承認した。

4) 高齢者雇用確保充実奨励金事業の件

高齢者雇用確保充実奨励金事業の実態調査アンケート方法詳細を報告し、そ

の承認を求めたところ全員異議なくこれを承認した。

5) 第62期通常総会の件

第62期通常総会開催詳細を報告し、その承認を求めたところ全員異議なく承認可決した。

6) 次回理事会開催日決定の件

次回理事会の開催日を議場に諮ったところ、全員異議なく承認可決した。